

小学校英語における授業改善に向けたICT活用に関する意識調査

— 教員養成課程で小学校教員を目指す大学生の視点から —

坂本 南美

岡山理科大学教育学部中等教育学科英語教育コース

(2020年11月2日受付、2020年12月11日受理)

1. はじめに

学校教育におけるICT活用に関して、文部科学省（2019, 2020）のGIGAスクール構想（GIGA：Global and Innovation Gateway for All）をはじめとする国の施策では、児童生徒一人一台の学習者用端末、校内LAN整備、などを含む「環境整備の標準仕様」をはじめ、「クラウド活用前提のセキュリティガイドライン」や「学校ICT利活用ノウハウ集」の公表、「関係省庁の施策との連携」、「民間企業等からの支援協力募集」などを盛り込んだ「令和の時代のスタンダードな学校」の構想が提案された。これらの施策のもと、学校教育現場では、これまでのコンピュータや電子黒板、実物投影機等の使用だけでなく、タブレット活用や反転授業など、多様なICTの活用を取り入れた授業も実践されるようになった。特に、いち早くデジタル教科書を紙媒体の教科書と併用して使用してきた小学校英語授業では、音声や映像の活用に加えて、調べ学習・発表活動などの場面で使用するタブレット等の導入も進み、教師のICT活用指導力向上をサポートする研修も増えてきている。また、昨今の新型コロナウイルス感染症の影響により、小中高等学校の教育現場では、オンラインによる授業及び学習活動も視野に入れた教師のICT活用指導力が求められる時代へとシフトしている。これらの背景のもと、将来教員を志す学生のICT活用指導力の育成は、教員養成課程における喫緊の課題の一つであると言えるだろう。本研究では、2018年度から2020年度までの3年間、小学校教員を目指す大学3年生を対象として、小学校英語授業でのICT活用に対する意識調査を行い、年度ごとの学生の意識の相違点及び特徴を検証し、その結果をもとに今後の授業改善を示唆することを目的とする。

2. 研究の背景

2-1 学校教育におけるICT活用の動向

昨今のICT化が進む社会において、学校現場でもICTを活用した教育の必要性は急速に高まっている。文部科学省（2010）による『教育の情報化に関する手引き』には、小中高等学校における授業実践について、「授業の中でICTを効果的に活用し、指導方法の改善を図りながら、児童生徒の学力向上につなげていくことが重要であると考えられる」と明記されている。一言にICTと言っても、インターネットからパソコン使用、ソフトウェアの活用、書画カメラやデジタル教科書の使用、反転授業の実施まで多彩な内容を含んでいる。この文部科学省の手引には、教科指導におけるICT活用とは、「教科の学習目標を達成するために教師や児童がICTを活用することである」と記されており、この活用方法について、以下の3つに分類して説明されている（文部科学省，2010）。

- 1) 学習指導の準備と評価のための教師によるICT活用
- 2) 授業での教師によるICT活用
- 3) 児童生徒によるICT活用

つまり、教師が教室でクラス全体に教材を提示するためのプロジェクタや書画カメラ等の使用だけでなく、プレゼンテーションソフト等を使った教師による教材の作成、児童生徒の学習評価のためのICT活用、さらに児童生徒が自らICTを使って学習を深めるための使用についても含まれているということである。そして、教員がこれらのICT活用を実践していくために必要なICT活用能力について、文部科学省（2018）が改訂版とし

て公示した『教員のICT活用指導力チェックリスト』では、以下の4つの能力に関するチェックリストが示された。

- A 教材研究・指導の準備・評価・校務などにICTを活用する能力
- B 授業にICTを活用して指導する能力
- C 児童生徒のICT活用を指導する能力
- D 情報活用の基盤となる知識や態度について指導する能力

英語授業でのICT活用を考えた場合、評価を行ったり校務に活用したりする能力、教師が英語を用いた導入やプレゼンテーションソフトによる教材を作成する能力、学習者が英語学習の中でICTを使用できるように指導する能力、情報モラルも含めて学習者がICTを適切に活用する態度を育成する能力について、カテゴリーに分類して捉えることができる。これらを見ると、教師に求められるICT活用指導力とは、授業中に児童生徒の個人活動での指導力とクラス全体への指導力、そして授業外の校務をこなす総合的な能力を指しているといえるだろう。

さらに、国全体の動きとして、学校現場におけるICT環境の充実という視点から、文部科学省は、2019年12月にGIGAスクール構想を発表した。このプロジェクトは、児童生徒1人に1台のパソコンを配給し、全国の学校に高速大容量の通信ネットワークを整備して、多様な子どもたちに最適化された創造性を育む教育を実現する構想である。翌年2月に示された「GIGAスクール構想の実現ロードマップ」（2020）では、当初は2019年から5年計画で行われる予定だったGIGAスクール構想だが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による休校措置等が課題となったことで、教育の情報化の必要性が急速に高まり、前倒しをしながら進められることが盛り込まれた。これらの社会の動きを背景に、2020年4月に閣議決定された政府の「新型コロナウイルス感染症緊急経済対策」では、教育現場でのICT活用について次のような方向性が示された。

1. 2023年度までの児童生徒1人1台端末の整備スケジュールの加速
2. 学校現場へのICT技術者の配置の支援
3. 在宅・オンライン学習に必要な通信環境の整備
4. 在宅でのPC等を用いた問題演習による学習・評価が可能なプラットフォームの実現

この対策に連動し、また新型コロナウイルス感染症の影響によるGIGAスクール構想の加速によって、学校休校時においてもICTの活用により子どもたちの学びを保障できる環境を早急を実現するために、2020年度補正予算案では総額2292億円が計上された。

これらの背景のもと、小中高等学校での英語教育においても、教員による充実したICT活用の実現を考えると、大学の教員養成段階から、教員を目指して学ぶ大学生たちにデジタル教科書使用等を活用する力を育成することに加えて、自作の言語活動教材やオンライン学習の手法、反転授業の取り組みなど、多様なICTを活用できる実践力の育成を目指すことは喫緊の課題となる。本研究では、2020年4月より、3、4年生に外国語活動、5、6年生に外国語科が始まった小学校英語教育に焦点を絞り、小学校教員養成段階にある大学生の小学校英語教育におけるICT活用に対する意識調査を実施する。

2-2 小学校英語教育におけるICT活用

文部科学省（2014）は、『英語教育におけるICTの活用』の中で、小学校英語教育において学習効果の高いコンテンツとして、デジタル教科書、音声認識等の児童の興味を引き出すコンテンツ、教員学習用ソフトについて検討することを提案した。小学校で英語授業が始まった頃に主流であったCD等による音声教材だけでなく、教科書に準拠したデジタルの音声教材や映像資料、チャンツや歌などの多様なコンテンツも取めたデジタル教科書は実際の英語授業に必要な不可欠な教材となっている。また、紙面の教科書ページに掲載されているQRコードから音源や映像に直接アクセスすることも可能となっている。以前はデジタルの資料や教材は、教員が自ら探したり、作成したりしていたが、今では新出単語の発音だけではなく、各ユニットの場面に合わせた画像や動画も充実しており、児童の興味を引き付ける多様なコンテンツが効果的に収録されている。また、一斉学習、個別学習、協働学習の各学習形態に合わせて使用できるように想定されたコンテンツも多

彩であり、設定された場面や状況に適したアプローチで盛り込まれている。小学校では、2020年完全実施の学習指導要領に向けた移行期間（2018・2019年度）に、このデジタル教科書の使用が急速に浸透し、発音指導やチャンツによる定型表現のイントネーション習得などの音声指導に活用され、指導教員が英語授業で活用するICTの主流教材となってきた。

学校でのICTの環境整備については、文部科学省（2019）の「学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」によると、教員の校務用コンピュータ整備率は、2005年に33.4%だったものが2011年に99.2%まで高まり、その後は2015年に113.9%、2019年には120.5%と増えている。無線ではないが、普通教室の校内LAN整備率については、2005年に44.3%だったものが、2011年に82.3%、2015年に86.4%、2019年には89.9%と増えている。また、この実態調査では、先に述べた「教員のICT活用指導力チェックリスト」（2018）の4つの項目（A：教材研究・指導の準備・評価・校務などにICTを活用する能力、B：授業にICTを活用して指導する能力、C：児童生徒のICT活用を指導する能力、D：情報活用の基盤となる知識や態度について指導する能力）についても調査が行われている。そこでは、小学校教員の「A：教材研究・指導の準備・評価・校務などにICTを活用する能力」が86.2%と最も高くなっているのに対して、最も低い結果が示されたのは、「B：授業にICTを活用して指導する能力」が69.7%であった。「B：授業にICTを活用して指導する能力」の下位項目に着目すると、その項目間にはばらつきが見られ、「B-1 児童生徒の興味・関心を高めたり、課題を明確につかませたり、学習内容を的確にまとめさせたりするために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。」は81.6%、「B-2 児童生徒に互いの意見・考え方・作品などを共有させたり、比較検討させたりするために、コンピュータや提示装置などを活用して児童生徒の意見などを効果的に提示する。」では69.4%、「B-3 知識の定着や技能の習熟をねらいとして、学習用ソフトウェアなどを活用して、繰り返し学習する課題や児童生徒一人一人の理解・習熟の程度に応じた課題などに取り組みせる。」65.5%、「B-4 グループで話し合っただけで考えをまとめたり、協働してレポート・資料・作品などを制作したりするなどの学習の際に、コンピュータやソフトウェアなどを効果的に活用させる。」は62.4%となっており、一斉指導が想定される活動場面においては、86.2%と高い割合でICTが使用されており、個に応じた指導を行う場面では60%台の使用率という結果となっている。具体的に小学校英語授業での一斉指導が想定される場面としては、児童が一斉に発声練習を行う単語の導入やチャンツ、教材の内容を紹介する英語での導入、異文化の紹介、まとまった内容理解を目指すリスニングなどの場面での活用が高まっていることが挙げられるだろう。この調査結果から、いわゆるデジタル教科書を用いて行える活動の範疇については、ICTの活用は、十分に浸透しているといえる。対して、個々の学習者の学習やグループでの活動場面でICTを活用する能力を高めることを見据えていくICT活用については、今後さらに進展させていく段階にきているといえるだろう。この調査における都道府県ごとのデータ結果を見てみると、ICT活用に関する教員研修への教員の受講率は国全体では三分の一の結果が出ており、県ごとの受講率ではその格差は大きい。教員の多忙な毎日により、現職教員が十分に研修に参加することが難しい現状にあることが予想される中、教育現場へ教員を送り出す教員養成段階で、学生にこれらの能力を育成しておくことは非常に重要な課題であるといえるだろう。これらの背景のもと、教員養成学部では、どのような能力を育成するかを見据え、デジタル教科書の使用だけでなく、インターネットを活用した授業デザイン、個人やグループ活動での活用など、幅広いICT活用を視野に入れた実践的能力を高める教育を目指す必要がある。

3. 研究目的

本研究は、小学校教員を目指して教育学部で学ぶ大学生が、小学校英語授業でのICTの活用について抱いている意識調査を行うことを目的とする。昨今の小中高等学校及び大学では、各教科・科目の授業で、ICTを活用しながら学習者の学びを深めていくことを目指して、急速な環境整備や教材開発が進められている。特に2020年のはじめの新型コロナウイルス感染症の影響を受け、ICT活用における多様なアプローチの必要性和担当教員の技術的開発は喫緊の課題として注目を集めてきた。小学校での英語授業実践に着目すると、現在大学に在籍する大学生の多くは、ちょうど小学校に英語教育が導入された時期に小学校に在籍していた世代にあたり、これまでの小学校英語授業を知らないまま大学で学ぶ世代から、いよいよ自らが小学校英語授業を体験した教員として教育現場へ出ていく年代となる。彼らは、小学校時代にどのようなICT活用を経験したのか、その経験は現在の学びとつながっているか、そしてそれらは将来の自らの教育実践を考えた時にどのような影響を与えているか。本研究では、教員養成課程で小学校教員を目指して学ぶ大学生が、小学校英語授業で

のICT活用に対して抱く意識について調査と今後の展望に資する考察を目的とする。

4. 研究方法

本研究では、2018年-2020年の3カ年にわたり、教育学部初等教育学科で「ICT活用教育」の講義を受講した各年度の大学3年生を対象に実施した。主なデータは、質問紙及び振り返り記述である。この講義は、大学3年生を対象に開講された春学期の科目であり、教員養成課程の必修科目である。参加学生（2018年度74名、2019年度68名、2020年度65名）は、いずれも全15回の最終講義日（2018年8月4日、2019年8月9日、2020年8月7日）から1週間の期間内にオンライン上で質問紙に回答し、ICT活用教育授業を受けた振り返りを記述した。質問紙は、大きく3つのセクションに分かれている。1つ目のセクションでは、彼らが小学校時代に受けた英語授業でのICT活用内容に関する項目、2つ目のセクションでは現在の彼らのICT活用への意識に関する項目、そして3つ目のセクションではこれからの小学校英語授業におけるICT活用の可能性に関する項目を設けた。また、振り返りを記述するセクションは、ICT活用教育の授業の振り返りと小学校英語授業でのICT活用の可能性について考えをまとめる内容とした。

質問紙を実施した3学年のうち、2018年度実施学生は、小学校英語に関して国が動き始めた2001年に小学校3年生であった学年である。この学年は、「総合的な学習の時間」の一環として英語活動を体験し、国が全小学校に配布した『英語ノート』を用いた授業を小学校6年生の1年間だけ体験している。2019年度実施学生は、小学2年生の時に全国で小学校英語活動に関する動きが始まり、5,6年生の2年間に『英語ノート』を用いた授業を体験している。2020年度実施学生は、小学校に入学した年がちょうど国が小学校英語教育に着手し始めた年と重なり、日本の小学校英語教育とともに育った学年であるともいえる。この学年が小学校6年生だった2011年は、学習指導要領が改訂された年であり、小学校学習過程で5,6年生の必須として「外国語活動」の時間が導入された年である。この年から週に1時間の外国語活動の授業が始まった。

5. 研究結果と考察

5-1 質問紙調査結果と考察

本研究では、2018年から3年間、小学校教員を目指す学生を対象とした質問紙調査を行った。1つ目のセクションでは、小学校時代に受けた外国語活動の授業におけるICT活用についての項目を設けた。ICT活用状況について尋ねる項目では、4段階（1. 毎回活用していた、2. ときどき活用していた、3. あまり活用していなかった、4. 活用していなかった）として、以下の回答結果となった（表1）。それぞれの数値は、質問紙を実施した総数に対する割合（%）で示している。

表1 小学校の時の英語授業（外国語活動）では、ICTを活用していましたか。（%）

	2018 (N=74)	2019 (N=68)	2020 (N=65)
毎回活用していた	8.1	7.4	9.2
ときどき活用していた	36.5	42.6	47.7
あまり活用していなかった	39.2	30.9	23.1
活用していなかった	9.5	13.3	20.0
無回答	6.7	5.8	0

2018年度実施学生は、2002年の小学校カリキュラムに「総合的な学習の時間」の一環として英語活動が導入された6年後に、小学5年生に在学していた学年である。3年間の推移を見ると、「毎回活用していた」と答えた学生は、どの年度も一桁台と少ないが、「ときどき活用していた」の回答者と合わせ、何らかの形でICTを活用した英語授業を受けた経験のある学生の割合を見てみると、2018年度44.6%、2019年度50.0%、2020年度56.9%と年々増加傾向にある。同時に、「あまり活用していなかった」と答えた学生の割合が年を追うごとに減少しているが、「活用していなかった」と答えた割合は増えており、小学校英語授業でのICT活用の差は年ごとに開いていたことがうかがえる。

また、活用していた具体的なICTの内容について答える項目（複数回答可）では以下の結果が得られた（表2）。

表2 活用していた人は、どのようなICTを活用していましたか。記憶しているものを選択してください。
(人数：複数回答可)

	2018	2019	2020
CDやパソコンを用いた歌や音楽の再生	36	37	43
パワーポイント等を用いた画像の提示	15	11	16
テレビ画面やスクリーンを用いた動画の視聴	19	18	15
パワーポイントやデジタル教科書を用いた単語の導入	3	2	4
テレビ画面やスクリーンを用いた新しい英語表現の導入	2	3	3
テレビ画面やスクリーンを用いた単語練習	2	3	5
テレビ画面やスクリーンを用いた新しい英語表現の練習	2	2	2
ソフトを用いたクイズ	3	4	3
ソフトを用いたゲーム	1	1	3
ALTの母国や文化紹介の際にテレビ画面やスクリーンを用いた複合的な使用	0	1	0
日本の文化を紹介する際にテレビ画面やスクリーンを用いた複合的な使用	2	3	9
人物紹介の場で、テレビ画面やスクリーンを用いた複合的な使用	2	3	1
オンライン授業動画	0	0	1
クイズレットなどの自主学習ソフト	0	0	0
反転授業の形態	0	0	0
活用されていた覚えがない	5	4	2

集計の結果、3学年を通して最も活用されていたのは「CDやパソコンを用いた歌や音楽の再生」であった。小学校英語授業で初めて使用された教材の『英語ノート』では、音声CDが付属教材として国から配布された。2018年度実施学生は6年生、2018年度・2020年度実施学生は5, 6年生で『英語ノート』を用いた授業を体験した学年であり、質問紙調査の結果から、付属の音声CDは使いやすい教材だったと推察される。いずれの年度も、「CDやパソコンを用いた歌や音楽の再生」に続いて、「パワーポイント等を用いた画像の提示」、「テレビ画面やスクリーンを用いた動画の視聴」を経験した学生が多く、これらは英語授業の中の一斉指導の場で活用しやすいICTコンテンツである。3学年のいずれの学年も、彼らが小学校に在籍していた2000年代は、「総合的な学習の時間」に国際理解を軸とした授業展開が示された時期であり、その目的も含めて、クラス一斉に英語の歌やチャンツ・ライム、異文化を紹介する画像や動画などに触れ、学習内容の理解を深めるために活用できるコンテンツであったと推測される。

これらの授業を体験した大学生が、大学での学びを踏まえて、小学校の英語授業で活用するICTの中で効果的だと感じるものを回答する項目（複数回答可）では以下の結果が得られた（表3）。

表3 小学校の英語授業で活用するICTの中で効果的だと感じる項目を選択してください。（人数：複数回答可）

	2018	2019	2020
CDやパソコンを用いた歌や音楽の再生	51	38	36
パワーポイント等を用いた画像の提示	24	18	21
テレビ画面やスクリーンを用いた動画の視聴	31	24	18
パワーポイントやデジタル教科書を用いた単語の導入	16	11	9
テレビ画面やスクリーンを用いた新しい英語表現の導入	15	9	9
テレビ画面やスクリーンを用いた単語練習	9	12	9
テレビ画面やスクリーンを用いた新しい英語表現の練習	11	7	4
ソフトを用いたクイズ	5	9	7
ソフトを用いたゲーム	7	7	6
ALTの母国や文化紹介の際にテレビ画面やスクリーンを用いた複合的な使用	6	11	6
日本の文化を紹介する際にテレビ画面やスクリーンを用いた複合的な使用	8	9	13
人物紹介の場で、テレビ画面やスクリーンを用いた複合的な使用	9	5	7
オンライン授業動画	0	0	6
クイズレットなどの自主学習ソフト	0	0	7
反転授業の形態	0	1	2

英語授業で効果的だと感じるICTの中では、「CDやパソコンを用いた歌や音楽の再生」が最も多く、そのあとに「テレビ画面やスクリーンを用いた動画の視聴」、「パワーポイント等を用いた画像の提示」、「日

本の文化を紹介する際にテレビ画面やスクリーンを用いた複合的な使用」が続いており、彼らが小学校で実際に体験した活動と効果的だと感じるICTコンテンツを見ると、特に上位の3項目については、すべて学生の学習経験と合致していた。

また、将来自分自身が英語の授業を行う機会があれば、積極的にICTを活用したいかということを開く項目については、以下の結果が得られた（表4）。

表4 将来、あなたが英語の授業を行う機会があれば、積極的にICTを活用していきたいですか。（%）

	2018 (N=74)	2019 (N=68)	2020 (N=65)
積極的に活用したい	20.3	17.6	78.5
ときどき活用したい	39.2	39.7	15.4
どちらとも言えない	20.3	25.0	3.0
あまり活用したくない	8.1	7.4	0
活用したくない	2.7	4.4	0
無回答	9.4	5.9	3.1

「積極的に活用したい」または「ときどき活用したい」という回答を合わせて、何らかの形で英語授業にICTを活用したいと答えた学生は、2018年59.5%、2019年57.3%、2020年93.9%と推移しており、2020年の数値が突出していることがわかる。2018年・2019年の学生と2020年の学生との違いとして挙げられる背景として、二点考えられる。まず、一つ目は、2020年の学生が小学校5年生の時に学習指導要領が改訂され、この年に英語授業が外国語活動として5,6年生のカリキュラムに年間35時間実施されることになった点である。この学年は、小学校5年生,6年生で週に一度の頻度で英語活動の授業を体験したはじめての学年となる。二つ目は、2020年、パンデミックとなった新型コロナウイルス感染症の影響を受け、大学の講義で対面授業が受けられず、オンデマンド型授業、ZoomやGoogle Meetなどのアプリを用いた同期型授業等、彼ら自身がオンラインを通して学ぶ経験をした点である。緊急事態宣言等のため、全国の小中高等学校では休校措置を取り、学校教育でも新たな学びの形を模索する動きが続いた。これら二点は、2018年実施学生・2019年実施学生の学習経験と大きく異なる点である。

また、自らが教壇に立って英語授業を行う場面を想定したときに、どのようなICTを活用したいかという項目（複数回答可）に対して以下の結果が得られた。

表5 活用していきたいと思う人は、どのようにICTを活用したいですか。（人数：複数回答可）

	2018	2019	2020
CDやパソコンを用いた歌や音楽の再生	55	49	47
パワーポイント等を用いた画像の提示	24	32	38
テレビ画面やスクリーンを用いた動画の視聴	37	36	35
パワーポイントやデジタル教科書を用いた単語の導入	20	31	23
テレビ画面やスクリーンを用いた新しい英語表現の導入	19	27	19
テレビ画面やスクリーンを用いた単語練習	17	19	22
テレビ画面やスクリーンを用いた新しい英語表現の練習	18	17	14
ソフトを用いたクイズ	17	28	21
ソフトを用いたゲーム	15	24	18
ALTの母国や文化紹介の際にテレビ画面やスクリーンを用いた複合的な使用	13	15	21
日本の文化を紹介する際にテレビ画面やスクリーンを用いた複合的な使用	19	21	18
人物紹介の場面で、テレビ画面やスクリーンを用いた複合的な使用	23	14	11
オンライン授業動画	0	0	9
クイズレットなどの自主学習ソフト	0	0	13
反転授業の形態	0	0	4
オンライン英会話など	5	3	1

いずれの学年においても、最も多く挙げたのは「CDやパソコンを用いた歌や音楽の再生」、続いて「パワーポイント等を用いた画像の提示」や「テレビ画面やスクリーンを用いた動画の視聴」である。いずれも表3で「効果的である」とした上位の項目である。学生たちは、学習者・授業者の両方の視点から効果があ

ると感じており、自らの体験を基にした活用イメージや使用方法も把握している内容とであると言えるだろう。その中で、2020年にのみ選択された項目として、「オンライン授業動画」「クイズレットなどの自主学習ソフト」「反転授業の形態」といったものに注目したい。2020年度の学生は、新型コロナウイルス感染症の影響による休校が余儀なくされた小中高等学校の教育現場において、ICTがいかに社会の現状の課題解決にアプローチできるか、またどのような課題が浮き彫りになってきたか、といった視点を大学の講義でも議論をしている。これらの経験が作用し、彼らの視点が教室でのICT活用という枠から、教室の内外を見据え、空間を超えたICT活用へと認識が変容していったことがうかがわれる。

さらに、今後の英語教育におけるICT活用の必要性について問う項目に関しては以下の結果となった(表6)。

表6 今後、小学校英語教育においてICT活用の必要性は高まっていくと思いますか。(%)

	2018 (N=74)	2019 (N=68)	2020 (N=65)
とてもそう思う	36.5	42.6	69.3
どちらかと言えばそう思う	37.9	39.8	21.5
どちらともいえない	14.9	11.8	4.6
どちらかと言えばそう思わない	4.0	2.9	0
そう思わない	0	0	0
無回答	6.7	2.9	4.6

小学校英語授業におけるICT活用の必要性について、「とてもそう思う」「どちらかと言えばそう思う」の回答により、何らかの必要性を感じている学生の割合は、2018年では74.4%、2019年は82.4%、2020年には90.8%となっており、毎年高い割合で増加している。また、いずれの学年も「そう思わない」と答えた学生はいなかったが、2020年実施学生については、「どちらかと言えばそう思わない」という回答も含めて、今後の小学校英語教育におけるICT活用の必要性は低いと感じている学生は一人もいなかった。小学校教員を目指す学生の中で、ICT活用の必要性への意識は年々高まっていることがわかる。

5-2 新型コロナウイルス感染症の影響に見る学生の意識傾向の変化

質問紙結果から、ICT活用の中で効果的だと感じる項目に着目すると、2018年・2019年実施学生と2020年実施学生では、その回答の傾向にいくつかの相違点がみられる。ここでは、「小学校の英語授業で活用するICTの中で効果的だと感じるもの」(表3)及び「自身が小学校教員として教壇に立った場合、活用していきたいと思う項目」(表5)に注目する。3学年を通して、ICT活用教育の講義では、プレゼンテーションソフトを利用した教材づくりからクイズレットなどの学習ソフト利用まで講義で扱ったが、2020年度のみ、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、例年の対面型授業だけではなく、Zoomやオンデマンドを用いたオンライン授業を行う回が大半となった。その中で、学生は最後の課題として、プレゼンテーションソフトを用いて小学生を対象とした配信型授業動画の模擬動画を作成した。彼らは、スライドの明瞭さ、録画時の音声説明の正確さ、動画全体の所用時間なども含めて教育的効果を念頭に置きながら、配信型授業動画をオンデマンド講義を通して仕上げた。講義では、学生が仕上げた授業動画は、オンラインコミュニティに提出してもらい、学生間で閲覧できるように設定し、クラスメイトの授業を視聴して、互いにフィードバックを行う機会も設けた。この背景を踏まえて、表3を見ると、小学校英語授業で効果的だと感じるICT項目のうち、「オンライン授業動画」「クイズレットなどの自主学習ソフト」「反転授業の形態」について、2018年・2019年実施学生の中でその効果を認識した学生はほぼ0人であったが、2020年実施学生においては、「オンライン授業動画」6人、「クイズレットなどの自主学習ソフト」7人、「反転授業の形態」2人が効果を感じているという結果になった。また、「自身が小学校教員として教壇に立った場合、活用していきたいと思う項目」(表5)に関してみると、2018年・2019年実施学生では、「オンライン授業動画」「クイズレットなどの自主学習ソフト」「反転授業の形態」のすべてにおいて0人であったことに対して、2020年実施学生は、「オンライン授業動画」9名、「クイズレットなどの自主学習ソフト」13名、「反転授業の形態」4名という結果が出ている。これらの結果を引き出した要因としては、2020年の新型コロナウイルス感染症によって、学校現場における急務の課題としてオンライン授業実践の必要性を報道等で実際に見聞きしたこと、ICT活用教育の講義の中で自らが配信型授業動画の模擬動画を作成したこと、児童が登校できない場合に活用できる自主学習ソフト充実の必

要性を感じたことが挙げられるだろう。つまり、大学の講義で学んだ理論的知識と実践に基づく知識、および社会のニーズを交差させながらICT活用について概観した時、学生の意識傾向に変化が生じたといえるだろう。

6. 今後の課題

2020年に新しい学習指導要領が全面実施となり、これまで小学校5,6年生で外国語活動として行われていた英語授業が、2020年からは、3,4年生での外国語活動、5,6年生での外国語科としてスタートした。英語授業で使用される教科書は、教師用デジタル教科書との併用が前提として作成されており、音声指導や言語活動場面での使用も含めて、ICTを効果的に活用した授業づくりは、教科指導と並行して重要な要素となっている。小学校に英語教育が導入され始めてからまだ歴史は浅いため、大学時代に初等教育における英語教育を学んだ小学校教員はまだまだ少ないのが現状である。これから教員として教育現場へ学生を送り出す教員養成の大学が、学生にデジタル教科書使用に加えて、授業中の音声や映像、画像の提示から言語活動での使用、オンライン教材や反転授業まで、幅広く多様なICT活用指導力を育成していくことは非常に重要である。また、変化する社会のニーズや現状における課題に柔軟に対応しながら、ICTとアナログ教材との効果的な併用を見据えて、児童の学習に寄り添える教員の育成を目指した大学教育の重要性もさらに高まっていくだろう。

いよいよ小学校時代に英語授業を体験した学習者が大学の教員養成課程で学ぶ世代となった。小学校英語授業を受けた経験者であり、ICT活用について学んだ初等教育学科の学生に行った質問紙の結果からは、授業で使用された個々のICTコンテンツの有効性が体験的に実感されていることがわかった。これらの結果を踏まえて、教員養成の学部では、学生たちにICT活用に関係する理論的知識や倫理的事項を定着させながら、同時に、実際の学校現場を想定したICT活用の実践活動も積み重ねていくことで、学生たちのICT活用への意識を高め、ICT活用授業力の育成へとつなげていくことが重要であることが明らかになってきた。さらに、学校現場で昨今のようなパンデミック等の緊急の場面が生じたとしても、多様なICTを総合的に活用しながら児童の英語力を育成できる能力を備えた学生を育てていくことも非常に重要な課題と言える。今後、本研究の結果をもとに、理論的背景を踏まえたICT活用授業力を有する即戦力となる学生の育成を目指したい。

参考文献

- 1) 文部科学省. (2010). 教育の情報化に関する手引き.
https://www.mext.go.jp/content/20200609-mxt_jogai01-000003284_002.pdf (2020年10月25日閲覧)
- 2) 文部科学省. (2008). 小学校学習指導要領.
- 3) 文部科学省. (2014). 英語教育におけるICTの活用.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2014/06/26/1348388_06.pdf (2020年10月25日閲覧)
- 4) 文部科学省. (2017). 小学校学習指導要領.
- 5) 文部科学省. (2018). 教員のICT活用指導力チェックリスト.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/05/17/1416800_001.pdf (2020年10月25日閲覧)
- 6) 文部科学省. (2019). 学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果 (概要) .
https://www.mext.go.jp/content/20191224-mxt_jogai01-100013287_048.pdf (2020年10月25日閲覧)
- 7) 文部科学省. (2020). GIGAスクール構想の実現ロードマップ.
https://www.mext.go.jp/content/20200219-mxt_jogai02-000003278_402.pdf (2020年10月18日閲覧)
- 8) 文部科学省. (2020). 新型コロナウイルス感染症緊急経済対策.
https://www5.cao.go.jp/keizai1/keizaitaisaku/2020/20200407_taisaku.pdf. 最終閲覧日 (2020年10月18日閲覧)

Utilization of ICT in teaching English in elementary schools: Perspective of university students in teacher training course

Nami SAKAMOTO

*Department of Secondary Education, Faculty of Education
Okayama University of Science,
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan*

(Received November 2, 2020; accepted December 11, 2020)

In today's information and communication technology (ICT) enabled society, the need for ICT-based education in schools is growing rapidly. To maximize its utilization, teachers' perception needs to be considered. In particular, the use of ICT in the language classroom in primary education is focused on after the introduction of English at elementary schools. Considering the need for teachers to completely utilize ICT in English education, it is necessary to cultivate their ability to use digital tools and ways starting from the stage of teacher training at universities and through self-made language activity materials, online learning, and flipped classes. This study was designed to investigate university students' perception of the use of ICT for English as a foreign language (EFL) teaching in elementary schools in Japan. Consequently, questionnaire surveys were distributed to third-year university students, who were training in accordance with the teacher training course to become elementary school teachers. The author conducted questionnaire surveys every year from 2018 to 2020. The results indicate that their perception highlighted a contrast between their learning experience in their elementary schools and universities, and the online learning experience. This change due to the COVID-19 pandemic has led the students in 2020 to think of possible teaching tools that facilitate ICT-enabled teaching. The findings would indicate the knowledge and practice that are required to foster students enrolled in the teaching training course to become teachers who utilize ICT in English education.

Keywords: English education; utilizing of ICT; elementary school; university students; survey of attitude.